

「ちようどよかった、じゃねえよ」

鷺尾 エミ

職を失って5ヶ月経っているのに、あたしは余裕で生きてる。

4日ぶりの風呂から上がって、息つく間もなくキッチンに向かってお湯を沸かした。一人きりのワンルームで満たせるのは食欲と睡眠欲だけなのに、空腹すらも感じられなくなる時があるのはなんでなの？でも今は久しぶりに最高にお腹が減ってる。今のうちにカップ麺をかつ食らってやるんだから。しめにはご飯に生卵にチーズなんかも入れちゃって、それはもう。

朝だか夜だか分からないような生活をしていても、それなりに荒れている部屋が気にならないわけじゃない。キッチンから部屋を見渡していると、あそこのスナック菓子とかコンビニ弁当のゴミを全部回収して、カーペットをあげて隅々まで掃除機をかけて、机や棚の上の拭き掃除まですれば最高に気分が良い。自然とそんな妄想をしているのに、妄想の中よりずっと重たい身体が言うことを聞いてくれない。特に頭の重さは異様で、この部屋の中で頭がしゃんと自立している時間は少ない気がする。働いている時は何時間もしゃんと出来ていたのに、ひとりつて怖すぎ。社会とのつながりが無くなるとこんなこともできなくなるなんて、自分がどれだけ社会性にもたれて生きてきたか思い知らされる。

3分経った。

結局ラーメンを食べただけで、ご飯に生卵にチーズは入りそうにない。この無職生活で学んだこと。暴飲暴食も意外と難しい。

ブブツ。スマホのバイブレーションにも鈍感になりつつあるけど、たまたま手元で光ったスマホの画面は、あたしの頭を勢いよく起こした。

『高田あや香さん。お久しぶりです。中学の同級生の奥……』  
バナーでそこまで読んだだけで、全身の血が活発に巡り始めた。

「奥」までしか読めなかったけど、それが誰かはすぐに分かった。奥野直<sup>おくのなお</sup>。なんで彼があたしに連絡なんてしてきたんだろうか。メッセージを開いて全文を読んでしまいたい狂おしい好奇心に襲われながらも、ひどい風邪をひいた時のように全身の震えが止まらない。スマホを左手に持ち替え、右手でメッセージを開こうとした時、追加のメッセージが届いたことに驚いて手からスマホが滑り落ちた。

テレビのニュース番組のキャスターが今日の感染者数を伝えている。右肩上がりで増えていた感染者数は横ばいとなり、このトピックへの世間の関心は日に日に薄まっている。

あたしは仕事を辞める原因になったこの流行り病を憎んではいなかった。いっちょ前にいい機会だか思っただけのテキストやご当地グルメをとかく取り寄せた時期もあったし、人生長い目で見ればここがターニングポイントなのかもなんてね。思ってた。

たくさんの同僚に言われた、  
「高田さんにとって良いタイミングだったよね」

みんな何がとは言わないけど、言いたいことははっきりとわかった。この年齢になると同世代は結婚を機に辞めたり、将来を見据えて転職をする人も多かったから。送別会で卒業おめでとうなんて言われた時は引き攣った笑顔で最後の集合写真を撮るしかなかった。

深呼吸をして、こたつ布団の上に滑り落ちたスマホを拾い上げた。

『高田あや香さん。お久しぶりです。中学の同級生の奥野直です。突然連絡してしまってますみません。俺のこと覚えてる』

特に絵文字や記号のない一つ目のメッセージはこう続いていた。

『?』

奥野くん。直くん。奥野。どの呼び方にも馴染みのない彼の名前をぶつくさつぶやいてみる。

中学三年の時、右斜め前に座っていた彼の背中をあたしはフクロウみたいに時々ゆつくりと瞬きしながらじつと見つめていた。広くてごつごつとした背中は大人で、制服のワイシャツすらも余裕を演出するための衣装のようだった。授業中に机に突っ伏しているのを先生に指摘されても全然喰らってない。気だるそうにしながらも、反抗せずに姿勢を戻す彼にむしろ先生の方が所在無いつて感じになって、中学生のあたしは彼のカリスマ性の虜になった。

でも、そんな日々は長くは続かなくて、あっさりあたしに真冬が到来した。

いつものようにさっさと教室から出た彼が、同じクラスの女子と廊下で合流して会話しているのを見かけてしまった。目と目を合わせてるあの感じ。どっちが仕掛けたことか知らないけど、あたしは全てを察してそれ以上目で追うのはやめた。もう冬眠してしまいたい気持ちなのに、明日から期末テストが始まるなんて人生って残酷。

彼との思い出なんてそういう淡めのやつだけで十分なのに、今さらあたしの現実世界に踏み込んできた彼に返す適当な言葉が見つからない。

毎日働いてた時のあたしなら彼からの突然の連絡に小躍りして喜んで、久々の再会とか会う時は何を着ていこうとか、そこからのなんらかの明るい未来を想像して勝手に喜んでに違いない。でも今のあたしがそれをできないのは、このワンルームでのひきこもり生活が自己評価をすこぶる下げてしまつて、先のことを考えると頭が痛くなっちゃつて、他人を慮ったりすることのない生活をしてるから。そんなことを思いながらも、社会人時代に脳に染み込んだ習性で早くメッセージに返信をしないと気が済まない。自然と瞬きするのを忘れて乾いた目が霞む。どうして連絡してきたのか聞くべきか、それとも当たり障りのない返信だけしてしまうべきか。返信一つのためにこんなにも逡巡しなくちゃいけない今の自分のレベルに疲れる。

でも、取り繕う必要なんてないと思えた瞬間、あたしの指が頭よりも早く動き出した。

『お久しぶりです。高田あや香です。奥野さんのこと覚えてますよ。中学三年の時以来です。あの時は全然話したことなかったし、突然の連絡おどろきました。私のことなんて覚えてないと思ってた。あ、ほんとは覚えてなくて、何かのきっかけで思い出しただけなのかもしれないけど。』

同窓会とかそういう類のものならお断りさせていただきます。今求職中で忙しくて、申し訳ないです。でもせっかく連絡もらったのでこれだけは伝えさせてもらおうかな。あの時、私はずっとあなたのこと見てました。一瞬目が合ったりしたとき嬉しくて、もしかしたらこれから仲良くなれるかもなんて、そんな些細なことで期待したりしてました。私に気があるのかも、それくらい調子に乗って考えたりしたこともあります。正直に言う。技術室での授業覚えてますか？私と奥野さん向かい合わせの席だったんですよ。だから私はあの授業、いつもすごく楽しみにしてました。でも結果的に全くそういうことじゃなかったし、完全に全部勘違いだったみたいでほんとにすみません。こんな話されても困りますよね。きっと誰かに頼まれて連絡してくれたんだろうし。ほんとにすみません。元々連絡をくれた方にも謝っておいてください。せっかく繋いでくれたのにごめんなさい。』

今日で人生が終わってもいいと思ってるわけじゃないのに、久しぶりに湧き出た感情の泉にヘドロが混ざってたみたい。とんでもないものを送りつけてしまった。イカれてる。でも不思議と最初にメッセージを受け取った時のような全身の震えはなくて、自分の中の妙なスイッチがオンになっている感覚だけがあった。

久しぶりに窓を開けると風が意外に生ぬるくて自分のため息が溶けて消えていった。窓際の床にそのまま座り込んで吸い込む空気は埃っぽくてうざったい。さっきまでのすごい勢いで異常な文章を打ち込んでいたスマホはショック死したのか真っ黒い画面のまま床に放られている。今の生活だけでなく、過去の思い出まで殺す必要なんてないのに。こたつまで戻る気力がなく、そのまま床に寝転んで落ちていた膝掛けにくるまった。

ブブツ。今度はスマホのバイブレーションが部屋全体を震動させた。暗い部屋で強い光を放ち、その周りだけ明るくなって空間を埃が舞っている。薄目のままスマホの方に転がっていくと

「きゃっ！」

画面を見て一人で叫んだ。もう返ってこないと思っていた奥野直からのメッセージが開かれた。

『今度2人で会いませんか？』

英語の先生が若い男の先生で、たしか竹林とかって名前だったんだけど、すらっとした長身でバスケット部の顧問でそれなりに生徒ウケする感じの授業をした気がする。竹林が授業の中で生徒に好きな芸能人とかを聞く流れになって、もちろん嬉しそうに答える人もいれ

ば答えたくなさそうな人もいた。

「奥野は？誰が好きなの。教えてよ」

自分で作り出した流れに則って聞いた竹林に対して彼は、嫌っす、と一言だけ答えた。教室全体の弛緩した雰囲気を完全に無視した一言に、なんだよーと野次る生徒もいたのはいたけど、本当は自分も言いたくなかったって人もたくさんいたと思うから、彼はきつと後に続くはずだった彼らを救ったと思う。

あの竹林すらも彼の前ではこんなにダサイことになっちゃうんだって感じた出来事だった。彼には天性のカリスマ性がある。何より、彼はとてつもなく”まとも”な人なのである。あたしはきつと彼のそういう”まとも”なところに惹かれていた。

まともじゃないあたしのメッセージに対して、今度会いませんかなんて言うやつじゃなかったのに。

寒い。ずつと床に転がっていたのでさすがに体が冷えてしまって、こたつに戻って温度を強に変えた。スマホを見ると充電マークのところが赤くなったので、こたつに電力を取られたみたいになっている。

彼は、あたしに会って何がしたいんだろう。

もし本当に再会したとして、あたしは何を話すんだろう。

きつとたくさん質問してしまうんだろう。自分ばかり話すのは好きじゃないけど、あたしの質問攻めに対して、彼が簡単に一言で返してしまう様子がありありと想像できた。一応誘いを受けたのはあたしなのに、少し面倒くさそうな態度をとりながらも、きつと全部の質問に答えてくれる彼の姿は、あのまともな彼のままだ。

会いたい。あたしも。会って話したい。

『こんな私でよければ、ぜひ会いましょう』

送ってしまった気づいたのは、プロポーズの返事みたいになってしまっているということとで、読み返して赤面した。でも今の彼ならこんな言葉も受け止めてくれるんじゃないかという妙な自信もあった。

『いつが都合良いとかある？』

都合なんていくらでもつくんだけど、それを正直に言えるほど引きこもりとしてのメンタルは育っていないので、適度に嘘をついた。

『来週は割といつでも空いてるよ』

『そっか。じゃあ月曜の夜とかどう？』

『いいね、月曜。その日にしましょう』

信じられないスピードで外出する予定が立ってしまった。月曜の夜には彼に会えるんだ。

『さっきも言ってたけど、高田さんって今求職中なんだよね？』

『そうだよ』

『実は俺、来月には九州に転勤なんだよね』

そんな彼の仕事の話も今度会った時にたくさんしたいと思いつつ、ざらりと心に鳥肌が立っていくのを感じた。

『そうそう。全国転勤あつて大変なんだよね』

『そっか。私も頑張らないと』

打ちながら心の鳥肌が身体の表面にもざらりと浮き出てきた。浮つく心が勝手に落ち着きを取り戻してしまっている。待って、待って、待って。

『高田さんこそ大変だったろうにごめん』

『私は全然』

彼と再会して、付き合うことになって、彼は九州に引っ越しちゃうけどあたしは今求職中の身だから、なんならそのまま九州に着いて行って同棲とかも始められちゃうし、生活に問題がなければそのまま結婚とかつてもスムーズに考えられるよね。なんていいタイミング。なんていいタイミングであたしは職を失って生活が変わって一人で生きていたんだろう。彼が迎えに来るのを待ってたみたい…

そこまで思考が巡った瞬間、目の前が白く霞んだ。

昔惹かれてた彼のまともなところに、今の私は泣かされた。相変わらずちゃんとしてるね、彼に死んだ心で言う自分を想像する。

テレビのニュース番組が、行動制限が無くなり賑わいを取り戻し始めた街の様子を取り上げている。ずっとできなかつた飲み会も旅行も、もう気兼ねなく行けるんだね。

ちようどよかった、じゃねえよ。

『ごめん！ たつた今面接受けてたところからメール来て、来週の月曜の夜に次の面談することになった。せっかくの機会だったのにごめんささい』

1秒も見返すことなく送信していた。このメッセージを見ても表情ひとつ変えずに次の候補にメッセージを送る彼を想像しながら。